



○1 学期始業式講話 「大きな勇気と3C」

令和6年度が始まりました。新年度を迎え、生徒のみなさんには気持ちもあらたに、自己実現に向け「師弟同行」で「ともがら」と切磋琢磨して歩いて行ってほしいと思います。

特に進路実現のためには学力向上が不可欠です。学問に王道なし。学力は家庭学習時間に比例します。違う視点で言えば、スマホ時間には反比例します。先送りしていいのは恩だけで、今なすべきことは先送りできません。

昨年度から「小さな挑戦、小さな気遣い、大きな志」という合言葉を、「自立への道程」に添えています。

昨年度の終業式で、車いすテニスの三木拓也選手の「小さな挑戦の積み重ねが今の自分をつくっている」という言葉を紹介したところです。

挑戦をするために最も必要なものの一つが、大きな勇気だと思っています。言い方を代えれば「前に踏み出す力」です。経済産業省が2006年に提唱した社会人基礎力では、「考え抜く力」、「チームで働く力」、そして「前に踏み出す力」の3つの能力が示されています。社会人基礎力は、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要で基礎的な力として示されたものです。では、どうすれば「前に踏み出す力」が湧いてくるのでしょうか。

「蛮勇」という言葉があります。日本史では、蛮勇演説という事件で有名です。日清戦争前の帝国議会で、軍備拡張の正当性を訴えた海軍大臣・樺山資紀による、ただ勇ましいだけの演説と揶揄された事件です。

また、「匹夫の勇」という言葉もあります。中国・戦国時代の儒学者である孟子の考えを紹介する書物『孟子』に出てくる言葉で、血気にはやった力まかせの勇気という意味です。孟子が齊の宣王に、敵対する国との外交姿勢を話す中で、「すぐに刀の柄(つか)に手をかけ威嚇して息まくようなのは”匹夫の勇”で、一人だけを相手にする小勇。王ならば天下の民を幸せに導くために怒る大勇を知るべきだ」と諭したそうです。

つまり、考えの浅い者は、きちんと計画や準備をしないまま、思い切りだけで物事に取り掛かろうとするものだということのたとえです。それに対して大勇とは、本当の勇気、真に必要なときの勇気とされます。言い方を変えれば、気遣いのできるような人が持つ、努力に裏付けされた勇気こそが大きな勇気だと思っています。

何事もまず飛び込んでみることは大事です。何事もチャンス(Chance)をキャッチ(Catch)することからはじまります。例えば、松江東高校ではボランティアやイベントなど様々なチャンスが用意されています。そこに関心や好奇心を持ち、まずは参加してみることです。その次からが本当の挑戦、チャレンジ(challenge)です。チャレンジには、やりがいのある課題、難問という意味もあります。挑戦に向けては、努力や準備が必要になってきます。すぐに結果が出ません。小さな挑戦の積み重ねです。大きな勇気をもってあきらめず積み重ねていくことが大事です。しっかり準備して臨めば、おのずと前に前にと踏み出したくなるものではないでしょうか。小さな挑戦を積み重ねていけば、失敗しても、悔しい気持ちが覚悟に変わり、その覚悟が前に踏み出させていくと思います。

マラソンで疲労などにより足が止まって歩き出した時、また走り出すのには相当な覚



悟と勇気がいります。練習にかけた時間や量に比例して、その覚悟と勇気の湧き方は違ってきます。一生懸命努力して臨んだ時は、意地でもゴールしたい気持ちが途切れなく湧いてくるものです。それも前に踏み出す力です。

これは小さな気遣いにも言えます。電車などで席を譲ったりする時にも大きな勇気が必要となるものです。

ちなみにマラソンで前に踏む出す力が湧いてくるもう一つに沿道の応援があります。普段は、「がんばれ〜」という言葉がプレッシャーに感じる時もあります。しかし、マラソンでは力に変わります

これから始まる新学期は、新しい仲間とのスタートになります。切磋琢磨する集団でありながら、応援し合う、気遣い合える集団になってください。それが高め合う集団です。

そして、3C、チャンス（Chance）をしっかりキャッチ（Catch）して、チャレンジ（challenge）につなげてください。

みなさんの可能性は無限大です。私たち教職員は、みなさんの可能性を高め、広げるための努力を惜しみません。小さな挑戦、小さな気遣いがもたらす小さな成長を見つめ、支援していきます。それが積み重なって大きな志につながっていきます。これから1年間「チーム東高」で頑張っていきましょう。

【ミニ校長室だより】

先日の新聞（4/1 山陰中央新報）で、『八日目の蟬』で有名な作家、角田光代（かくた みつよ）さんの「沖縄マラソン」というエッセイを読みました。

3学期終業式講話で、井上咲良さんの松江城マラソン挑戦に触れた際に、30キロ付近で足が止まるという私自身の体験談を話しました。角田さんも昨年12月のNAHAマラソンに挑戦した際、それまで調子が良かったのに32キロ付近で「もう無理」とふいに頭に浮かんだそうです。マラソンでは“30キロの壁”と呼ばれるのですが、これを角田さんは「倒れる前兆」として体が訴えている、セーブをかけさせようと体が訴えていると思っていたそうです。それが友人との話の中で、（私自身の）脳が私をだましにかかっているということに気づいたと書かれていました。井上咲良さんの言葉を借りれば「自分の弱虫」、角田さんの言葉を借りれば「悪魔の声」。角田さんはマラソンを17回走ってはじめて自分との闘いは、弱気な気持ちが伝わっていく自分の脳との闘いでもあると思ったそうです。マラソンを走っているとよく「痛いのは気のせい」という応援メッセージを目にします。弱気になり、だめな言い訳を考えがちな自分の脳に負けるなということなのでしょう。

角田さんは、そんなつらいマラソンなのに何度も走れる、走りたいと思うのは沿道の人々の応援であるからだとも書かれています。声をはりあげて応援してくれる人たちのたくさんの笑顔が、もうだめだとだましにかかる脳に強く効くから頑張れるのだと。ちなみに、このエッセイのタイトルは、「笑顔の応援、脳に効いた」でした。

角田さんは、あるインタビューで、NAHA マラソンは沿道の応援の方々と、ボランティアの方々の気持ちが熱く、そして温かくて毎回泣いてしまうと話されています。走り終える41キロメートル辺りまで、一般の方からの応援や飲食物等の無料提供がずっと絶えることがないそうです。毎年挑戦している隠岐の島ウルトラマラソンも同じ思いになります。近い将来NAHAマラソンにも挑戦してみたいと思います。